

学習院大学法学部 日本政治思想史Ⅱ 学年末試験

担当 中田 喜万

[講義：オンデマンド教材配信＋金曜4時限]

2022年1月28日（金）午後1時～

WebClass 上にてレポート回収

※下記の問題すべてに解答すること。問題順どおりに答えなさい。

※配信した教材以外も、自由に読み、調べてよい。その際、参考にした文献等を注記することが望ましい。

※提出すべき答案是、WebClass 上に、マイクロソフト Word または PDF の形式でアップロードしなさい。～切を厳守。

※提出ファイル名は、「日本政治思想史Ⅱ 学年末試験 16012000 安倍能成」という例にならって名づけなさい。ここで「16012000」に代えて自分の学籍番号を、また「安倍能成」に代えて自分の名前を記す。

※冒頭またはヘッダーに、自分の学籍番号・名前を明記しておくこと。

ページはA4判。文字数・ページ数は無制限。

※今学期は読書感想文の課題は無い。提出すべきものは、この学年末試験の答案のみである。

【 問 題 】

第一問 近世日本における不可知論の系譜を、伊藤仁斎・荻生徂徠・本居宣長を中心に論じなさい。

第二問 「文芸共和国」 *Respublica litteraria* の概念について説明し、それを江戸時代の思想文化史に応用しなさい。

第三問 近代日本国家において、いわゆる国家神道は「宗教」（または「信教」）のうちに属さない、とされた。どうしてそうなったのか、その経緯を説明しなさい。

第四問 日本社会が敗戦から復興し、いわゆる神武景気の活況を呈していた1957年初め、寺山修司は、「マッチ擦るつかのま海に霧ふかし 身捨つるほどの祖国はありや」という歌を発表した。高度経済成長が始まり、多くの人々が豊かさと自由を享受できるようになる中で、しかし厩大な犠牲をもたらした国家の存在をどう理解するか、問題はずっと見て見ぬふりをされ続け、曖昧なままにされていた。鋭敏な感性はその虚無感を、マッチの灯りで一瞬だけ垣間見える海の霧の深さに喻えたのである。

さて現代に生きる人々は、かつて日本列島に生きた人々のように、再び「祖国」や「宗教」のために「身を捨てる」ことがありうるだろうか。それとも、「祖国」や「宗教」以外に「身を捨てる」ほど大切なものがありうるだろうか。それとも、そんなものはまったく存在しないのだろうか。自由に論じなさい。

以 上